
ダンディズムにおける「演劇性」と「流動性」

ーバルバー・ドールヴィイを中心にー

佐藤 友一郎

発表要旨

19世紀に英仏を中心に展開した潮流であるダンディズムは、近代的自我をめぐる思想史上特異な位置を占めているにもかかわらず、これまでその特異性は注目されてこなかった。本発表はダンディズムにおける自我の特異性を浮かび上がらせることを目的とするが、その際、ダンディズムを西洋美学史の通時的なパースペクティブのなかに位置づけて考えてみるのが重要になってくる。というのも、ダンディズムと西洋美学史上重要なトポスであった「優雅」(grâce)とのあいだには密接な関係があるからである。この関係がダンディズムにおける自我という問題を考える際に重要なのである。

従来ダンディズムやロマン主義など、19世紀に一世を風靡した諸々の思想・文化潮流は、「意志」を基に肥大化した自我という観点から捉えられることが多かった。しかし、ロマン主義については、1980年代以降、ポラー (1987) やメニングハウス (1987) など、同一性のずらしという点でのロマン主義的自我とポストモダンの自我の共通性に光を当てる論者たちが登場してきている。自らの同一性をずらす自我という傾向は、ダンディズムにも見出すことができるのではないだろうか。ただし、ダンディズムを一枚岩のものとみなすことは難しい。この潮流はジョージ・ブランメル (1778-1840) にはじまり、オスカー・ワイルド (1854-1900) などいわゆる世紀末の作家・文化人にまで受け継がれている。その過程で幾多の要素が付け加えられ、あるいは失われたのである。このように複雑な様相を帯びたダンディズムという潮流の少なくとも一部には、自らの同一性をずらす自我が見出される。このような傾向が顕著にあらわれている著作が、バルバー・ドールヴィイ『ダンディズムとジョージ・ブランメルについて』(1845)である。本発表では、この作品を分析することで、ダンディズムにおける自我の流動性がどのような構造において機能していたかを明らかにする。そうすることで、近代的自我をめぐる従来の思想史上のダンディズムの位置を見直す視点を提示したい。

作品分析においては、まず、ダンディズムの根底に「倦怠」(ennui)と自我の「空虚さ」があることを示す。その上で、「空虚さ」がイロニーの精神と結びつくことで、流動的な自我を生み出していることを明らかにする。その際見過ごせないのが、ダンディズムの構造における他者との「関係」の重要性である。この作品では、ダンディズムの原動力を「虚栄心」

(vanité)とみなしているが、ここでの「虚栄心」とは、実は「関係性」そのものをあらわしているのである。そして、「優雅」(grâce)がダンディズムの基本要素となっていることが、大きな意味をもつ。「優雅」(grâce)とは、西洋文化史上において、流動性・関係性をあらわすトposだったからである。

このように分析を進めることで、ダンディズムのもつ演劇的人間観とでもいうべき傾向が浮き彫りになる。この傾向においては、自我は同一性の下に肥大化するのではなく変転するものとなる。世界の流動性と自我の流動性の相互作用関係が生まれているのである。

(京都大学)